

## 庚申諳夷大津上陸記事

水戸藩の儒学者（水戸学者）として著名な会沢正志斎の著。文政七年（一八二四）の、いわゆる大津浜（北茨城市）異人上陸事件の記録。一冊。写本。

文政七年五月二十八日、突如イギリス人十二人が大津浜に上陸するという事件が発生した。すでに水戸藩の近海には文化四年（一八〇七）頃から外国船が姿をみせるようになり、水戸藩では、那珂湊に数十人の武士を駐屯させるなど警戒を強めていた。文政六年になるとその頻度が増し、七年には三月以降毎日のように出沒するに至り、五月、ついに上陸という事態にまでなったのである。（『水戸市史』中巻（二））これは、本土の、しかも江戸に比較的近い場所に外国人がはじめて上陸した事件だけに、江戸幕府にも大きな衝撃を与え、幕府は翌年、異国船打払令を出すことになる。

本書は、この事件のさい、水戸藩から筆談役として、飛田子健とともに派遣された会沢正志斎が、翌六月に大津浜の寓居でイギリス人と応接したときの模様を記録したもので、一般には『諳夷問答』（一冊）として知られ、同書は東京都町田市の無窮会図書館と、東茨城郡内原町の寺門家にも写本が所蔵されているという。（『北茨城市史』上巻、『水戸市史』中巻（二））。本書の末尾には、

右諳夷記事一卷会沢先生所筆、以岡崎氏蔵

本写之。天保十三壬寅三月廿一日

と記されている。

なお、本書の表題にある「庚申」は甲申の誤りであり、

「諸夷」とはイギリスを当時「<sup>アンゲリア</sup>諸厄利亚」と称していたので、「諸厄利亚」の「夷人」という意味である。

さて、会沢は、おもに加比丹（カピタン）のゲビスンという者との間で行った問答を記し、その内容は次の四つを柱としている。

- (一) はじめかれらをロシア人と考えていたが、地球図を出して示し、イギリス人であることが判明した。航路は南海経由であることもわかった。
- (二) 何の目的で渡来したのかと尋ねれば、捕鯨のためという。しかし会沢は、これを口実にすぎないと考え、ゲビスンの顔を熟視すると、彼は会沢の意図を察知したごとくで、別に<sup>もり</sup>鉛の図などを画き、話題をそらして言葉を濁したように思えた。
- (三) 当今の世界の形勢について詳しく尋問すると、イギリス人をはじめとする西洋諸国の他国併呑の実状を概略知ることができた。
- (四) 渡来の目的を再度尋ねると、ゲビスンの答えは分明でなかったけれども、別人が世界図を指しながら日本からイギリスまでの海路を四指で再三撫でたので、これは「神州ヲ服従セシメント云ノ意ナルヘシ。悪ムベキノ甚キナリ」と考えた。

そのほか、この度の尋問では、類船三十五艘のうちこの度渡来したのは三艘で、そのうち一艘はカピタン、ゲビスンら乗組員四十四人、一艘はカピタンケンプら乗組員三十四人、一艘は乗組員二十八人であることなどがわ

かった。

会沢は、イギリス人との問答などを記した本文のあとに「弁妄附」を加え、かれらの渡来の本心は領土的野心にあり、日本人でかれらを捕鯨のためと信ずる者がいればそれは寇賊に荷担するというべきでその罪逃れがたい、と記している。また夷船で大砲を放つのは、「夷人」同士で本船の所在を知らせ合うためとか、仲間船への合図のためとか巷間いろいろいわれているが、実はそうではなく、人々を威嚇し、己が求めるところを得んとする野心からであるとして攘夷論を展開する。

この事件は、六月七日、幕府の代官らが大津浜に到着してイギリス人の尋問にあたり、上陸は薪水を求めるためのものであったとみて、かれらに薪水食糧などを与え釈放したことで、落着いた。会沢はもとよりこの措置に憤慨したものの、その決定をくつがえすことはできなかった。

会沢が、尊王攘夷論の先駆的著作として、やがて全国の有志にひろく読まれる有名な『新論』を著すのは、翌八年のことであり、その執筆動機がこの大津浜における自身の体験にあったことは明らかである。

(教育学部教授 鈴木暎一)